

RAIZIN presents

佐藤オオキ(nendo)の ひらめきのスイッチ

集中連載!

photo_Ayumi Yamamoto
text_Tomoko Ogawa editor_Yuka Uchida

第4回 朝井リョウ

佐藤オオキがインタビュアーとなって、
毎号、話題のクリエイターをゲストに招く集中連載。
第4回は平成生まれの直木賞作家、朝井リョウさんです。

さとうおおき 1977年カナダ生まれ。2002年(nendo)を設立。国内外で様々なデザインを手がける。10月1日まで、ベルギーの世界遺産に登録されている美術館(ル・グラン・オルニュ)にて個展を開催中。

あさいりょう 1989年岐阜県生まれ。早稲田大学卒業。2009年『桐島、部活やめるってよ』で第22回小説すばる新人賞を受賞しデビュー。13年『何者』で第148回直木賞、14年『世界地図の下書き』で第29回坪田譲治文学賞受賞。



学

生作家としてデビューし、一般企業に就職。2015年、約3年勤務した会社を辞め、専業作家となった朝井リョウさんが今回の佐藤オオキの対談相手だ。形を通してモノの「真」を伝えるデザインと、最後のページで真実を明かす小説。二人のひらめきの姿勢には、意外にも共通項が多いようである……。

興味の対象の中に入って内側からのぞいてみる。
佐藤 自身の置かれている環境は、作品に影響すると思いますか？
朝井 僕は環境に左右されるほうだと思います。シロアリ型なので。
佐藤 ……シロアリ型ですか？
朝井 つまり、ある環境に入ると、内側から食いつくすようなことをしてしまふんですね。初めは題材として意識していないのに、中から見ていううちに書きたくなくなるというパターンが続いています。
佐藤 朝井さんが書いてきた、スクールカーズや就職活動もシロアリ型執筆から生まれたんですね。気になる題材の中にわざと入って

逆算によって導き出す、価値に気づくまでのプロセス。

仕掛けていくんですか？
朝井 “仕掛かってる”というか。目的にする、色眼鏡で見ているって、色眼鏡で見ているって、一度入り込むんですね。
佐藤 単純に興味を持ったものに、一度入り込むんですね。
朝井 佐藤さんは、一目で本質的な価値がわかるようにデザインしているけど、僕はその価値に気づくプロセスを書いているので、まづ環境やシステムを肯定して、乗っかる必要があるんじゃないかと思うんです。
佐藤 興味の対象は関連性があるんですか？
朝井 掘っていくと、同じ地平にあったと気づくことはあります。最近、興味を持ったのが、「レスマツチ」と「日本語ラップ」と「ストリップ」。一見バラバラなようで、言い訳なしの行為という共通点があったんです。推敲を繰り返す小説と真逆に位置するような。佐藤 そういう即興的な表現は、得意ではないと思いますか？
朝井 できるよになりたいです。大事なのは、かかった時間よりも熱量だと思ってる。
佐藤 その熱量を創造へと変える



『何者』(新潮社) 就職活動を控え、何者かになろうとする若者の本音と自意識をあぶり出す。16年に映画化。『風と共にゆとりぬ』(文藝春秋) 累計77,000部を記録した『時をかけるゆとり』に続くエッセイ集第2弾。

逆算によって導き出す、価値に気づくまでのプロセス。
スイッチはありますか？
朝井 考えてはみたんですが、どこにそのスイッチがあるか、本当にわからなくて……。
佐藤 規則正しくやるかギリギリまで追い込むか、どちらがクリエイティブを発揮しやすいですか？
朝井 きちんとやるタイプです。プロットも初めに全部決めますね。
佐藤 逆算型だ。僕も完全にそう、安定してツーペースは打てるけど、ホームランは打ちづらい。
朝井 わかります。逆算しないほうが突破力のある作品が書けるとは思いますけど。僕の場合、最初にこの話で一番傷つく人を決めて、爆破された建物の本来の形を遡るように構成を考えていくんです。キャラが自然と動くようなことはないです、そういうことを言う作家は唾つきたと思う！
佐藤 柔軟そうに見えて、突然心のシャッターを下ろしますね(笑)。
作品について、人と話し合うことはあるんですか？
朝井 ほぼないですね。担当の編集者さんでさえ、話しても伝わらないことが多い気がします。
佐藤 でも、頭の中には作品のイメージがちゃんとあるんですね。
朝井 はい。人によっては震度1かもしれないけれど、自分にとっては震度7に感じる小説を書くのが好きなんです。なんてことないシーンでも、主人公の目を通すと戦場のような恐ろしさを持つような。そのギャップこそ、その人がこの社会で小説を書く意味なのだと思うので。その部分を言葉で伝

えるのは難しいので、書く前の段階ではあまり共有できないんです。
佐藤 コンセプトだけ説明しても理解してもらえないことは僕にもよくあります。なので、早く物質化するのを重視していますね。
朝井 スピードが上がればいいのか、筋トレみたく、量を書けばうまくはなる。自分なりの目線を持ちつつ、量も書けることが夢ですね。
佐藤 同じ筋トレ型だから、わかりやすい。ちなみに、作家における編集者ってどういう存在なんですか？ デザイナーがクライアントからオーダーを受ける関係とはちょっと違うんですね？
朝井 作家によるとは思いますが、以前は訓練の意味でもオーダーはありました。でも、ゲンキな話ですが、『何者』で直木賞をいただいてから一切なくなりましたね。
佐藤 わかりやすいですね(笑)。
お話を聞いていると朝井さんは分祈好きなんだなと感じますが、その目を、自身にも向けてますよね。
朝井 僕がこれまで書いてきたのは、読者に対して「味方だよ」とぎゅっとしながら、背中からナイフを突き刺すという話で、その刃は読者を貫通して僕にも刺さってるんです。じゃないとフェアじゃない。自分を棚上げしないことは大事。自己否定は年を重ねるほどできなくなると思うので、できるうちにしておこうと思ってます。
佐藤 身を削って書いていると、朝井 というより、自分が作品の外にいないような気をつけています。

作業は衆人環視のもとで。外出こそひらめきの一步。
これだけ小説ができるぞと確信する瞬間はありますか？
朝井 小説になる作品は、思いついた瞬間、ラストまで構成が完成していることが多いんです。後から気づくというか。だから、できるぞと確信する瞬間がわからないんです。
佐藤 その瞬間は、自分でコントロールできるものなんですか？
朝井 できないから困ってます。
佐藤 小説とは異なるエッセイを書くことで、いい切り替えができることもありそうですね。
朝井 確かに。僕、依頼がなくてもエッセイを書いているんですよ。文章を書くことが楽しいという感覚を思い出すためだけに。小説は意味付けをしないとイケないけれど、エッセイは教訓も感動も共感も要らない。何も差し出さないから、何も削られないんです。
佐藤 アスリートがジョギングやストレッチをする感じですね。文章を書く環境は選んでますか？
朝井 トイレさえあればどこでも。僕に文才があるとしたら、それはお腹が弱い習性と同時に宿されたものだと思います。ただ、家で作業するとサボってしまうので、ファミレスのような衆人環視のもとでするほうがかどります。朝起きてすぐ外へ出ることは、僕にとってはすごく大事ですね。
佐藤 というか朝井さんのスイッチ、それじゃないですか(笑)。



RAIZIN

ひらめきのスイッチを入れたいなら、大正製業の新炭酸飲料〈RAIZIN〉。(nendo) がクリエイティブディレクションを手がける。強烈な辛口の《DRY》、すっきりとした甘みの《MILD》の2種類。各185ml、実勢価格190円。
●問合せ/大正製業 ☎03・3985・1800。
<http://www.taisho.co.jp/raizin>